

井上靖「敦煌」と藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」
——「節度使」の描写をめぐる——

Yasushi Inoue's "Tun-huang" and Akira Fujieda's
"Sashu Kigigun Setsudoshi Shimatsu"
— On the Descriptions of "Setsudoshi" —

周 霞
ZHOU, Xia

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第47号 2019年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.47 2019

井上靖「敦煌」と藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」

―「節度使」の描写をめぐる―

周 霞

一、はじめに

井上靖（一九〇七年五月六日～一九九一年一月二九日）の長編小説「敦煌」は、一九五九年一月から五月にかけて雑誌『群像』（第14巻第1号～第5号）に連載され、同年十一月に講談社より単行本が刊行された。中国の西域を題材としたこの作品は、短編「楼蘭」（『文藝春秋』第36巻第7号、一九五八年七月）と合わせて一九六〇年一月、第一回「毎日芸術賞」を受賞し、井上靖の代表作の一つに数えられる。

「敦煌」は二一世紀の中国、宋の時代を背景に描かれている。以下、主人公趙行徳の遍歴を追ってあらすじを示す。趙行徳は、進士試験を受けるため、都開封に上る。結局、落第するが、城外の市場で偶然西夏の女を救う。その後、西夏の女からもらった布切れに記されている文字を追究するため、西夏に向かい、朱王礼の率いる西夏軍の漢人部隊に編入される。戦火の中の甘州城内で、趙行徳はウイグルの王女と出会って愛し合うようになる。しかし、それからまもなく、西夏文字を学ぶために趙行徳は興慶に派遣されることになる。ウイグルの王女は、趙行徳の二年半にわたる不在の間に、西夏の李元昊の側室にされ

る。生きて帰ってきた趙行徳を見ると、彼女は苦しんで城壁から投身自殺する。物語の最後に、西夏を裏切った朱王礼も沙州帰義軍節度使曹賢順も戦死し、賢順の弟延恵は沙州城内に留まって自らを火中に投じる。趙行徳は沙州が焼け落ちる寸前、寺に所蔵されている膨大な経典を守るため、商人尉遲光の欲心に乗じてそれらを城外の千仏洞へ運んで塗りこめる。二〇世紀になって、これら文化遺産が発掘され、世界の注目を集める。

「敦煌」は歴史小説であり、科挙、河西地方の状況、西夏の興起、節度使や仏教など、多くの歴史的な要素が含まれている。井上靖自筆の「作家のノート」、「敦煌」について⁽¹⁾と小説「敦煌」ノート⁽¹⁾によると、「敦煌」を書くにあたって、上記の歴史要素に関する資料や文献を大量に参看したという。例えば、『宋史』や『宋史紀事本末』などの史書、藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」や宮崎市定『科挙』などの研究文献、大谷探険隊の『新西域記』、小説『水滸伝』や随筆『東京夢華録』⁽²⁾など、たくさんジャンルのものがある。そのなかでも、井上は特に藤枝晃の「沙州帰義軍節度使始末」という論文（以下では便宜上、「藤枝論文」と称す）を重要なものとして位置づけており、

(1)

次のように述懐している。

大体当時の沙州、瓜州の権力者である帰義軍節度使なるものが、いかなるものであるか判らない。京大人文科学研究所の藤枝晃氏が、「帰義軍節度使始末」なる大変な労作を大学の卒業論文にしていなかったなら、私はこの小説の執筆を断念していたことであろうと思う。この論文は一冊に纏まっていないので、古い収録雑誌「東方学報」を図書館から借り出して来て、大学ノート五冊に書き写した。⁽³⁾

また、井上の参考箇所は「帰義軍節度使」自体に関する内容だけではなく、以下のように、帰義軍節度使の根拠地である沙州、つまり敦煌に対するイメージ作りも、藤枝論文に支えられているという。

節度使そのものについては勿論、それより、当時の敦煌というところが、異民族に取り巻かれた漢民族の独立国みたいなところと考えると間違いないことを、その論文（「藤枝論文」）を指す——（稿者注）から教えて貰ったことは、何より有難かった。⁽⁴⁾

この藤枝論文に関しては、一部の先行研究に言及されている。例えば、藤澤秀幸は「井上靖と敦煌」において、藤枝晃の研究が「敦煌」の成立に果たした大きな役割を、次のように述べている。

井上靖は『敦煌』執筆に際して、多くの資料を参考にした。たとえば、当時の沙州と瓜州を統治した帰義軍節度使については、藤枝晃の『帰義軍節度使始末』によってその知識を得た。（略）さらに藤枝晃の『維摩変の一場面』『西夏経』『遊牧民族の研究』『長江馬』等の論文も参考にされた。もし、藤枝晃の研究がなかったならば、『敦煌』は今われわれが目にする小説とは全く別のものとなったか、あるいは『敦煌』という小説自体が書かれなかったかもしれないのである。⁽⁵⁾

ここで、藤枝論文は「敦煌」執筆時の重要な参考資料として挙げられている。しかし、どのように小説「敦煌」に反映されているのかについては、分析が行なわれていない。

これに対して、尹芷汐は「埋葬／発見される異民族の歴史——『樓蘭』『敦煌』論』において、藤枝論文を引用しながら、「回鶻の郡主（ウイグルの王女を指す——稿者注）と尉遲光が漢人との混血であること」と「尉遲光の隊商の存在」⁽⁶⁾について、藤枝の記述が小説「敦煌」に実際に反映されていることを確認する。尹氏は「架空の人物と虚構のストーリーを書く際に、井上靖も歴史学の資料をきちんと参考しようとしている」と述べ、井上が用いた参考資料と「敦煌」における設定の背景とをつなげて論じる。ただし、尹氏の論では、「敦煌」の描写を、藤枝論文と照らし合わせながらの具体的な分析が行なわれていない。そのため、さらに掘り下げる余地があると考えられる。

本稿では、「節度使」の描写をめぐって、小説「敦煌」と藤枝論文との共通点と相違点をそれぞれ分析し、井上靖が藤枝論文をどのように利用したのかを検討する。

二、藤枝論文と「節度使」の概略

まず、藤枝晃と藤枝論文について紹介する。藤枝晃(一九一一年八月三日～一九九八年七月二三日)は東洋史学の専攻で、京都大学人文科学研究所の教授を務め、敦煌学及び西域から出土した古写本類の研究で知られている。『征服王朝』(秋田屋、一九四八年三月)、『文字の文化史』(岩波書店、一九七一年一〇月)などの著書がある。

藤枝論文(「沙州帰義軍節度使始末」)は、一九四一年二月から一九四三年一月まで、四回にわたって京都大学人文科学研究所発行の『東方学報』に掲載された。この論文は、「序説」、「上編 唐末の河西地方の形勢——張氏時代の帰義軍——」、「下編 東西交通路上の敦煌——曹氏時代の帰義軍——」と「余論」から構成され、諸史料に基づいて沙州帰義軍節度使の二百年間の歴史が考察されている。目次は次のとおりである。

序説

上編 唐末の河西地方の形勢

——張氏時代の帰義軍——

一、張氏の世系

二、帰義軍節度使(以上(一)に掲載)

三、帰義軍をめぐる諸外族の勢力

四、帰義軍と唐との関係(以上(二)に掲載)

下編 東西交通路上の敦煌

——曹氏時代の帰義軍——

一、曹氏の世系

二、五代宋初の東西交通路(以上(三)に掲載)

三、帰義軍の宋・遼との関係

四、帰義軍と東西交通路上の諸国との関係

五、西夏の興起と東西交通

余論 帰義軍の性格(以上(四)に掲載)⁽⁸⁾

小説「敦煌」に見られる藤枝論文の影響は、前述の尹氏が指摘したウイグルの王女と商人尉遲光に関する設定以外、ほかにも多数あると考えられる。例えば、涼州の位置・情勢・民族などに関する紹介(下編「二」——藤枝論文「下編」の「二、五代宋初の東西交通路」に関する内容が見られることを意味する、以下同じ)、甘州の位置・西夏に攻略されたこと(下編「二」、「三」、ウイグル女性の服装に関する描写(下編「四」、于闐王族の後裔と称する商人尉遲光の一族に関する情報(下編「二」)、最後の沙州帰義軍節度使「曹賢順」とその弟「延惠」(下編「二」)、及び彼らが支配する沙州と瓜州に関する記述(序

説、下編「三」、余論、帰義軍時代に敦煌の仏教が隆盛を極めている様子（余論）、また、敦煌に于闐が寄進した仏洞があること（下編「四」、などが挙げられる。藤枝論文の目次と照らし合わせていうと、井上靖は「序説」、「下編」と「余論」の内容を特に意識して参考にしたと思われる。以下の分析では、「節度使」をめぐって、共通点としての「沙州に関する概説」と「漢人コロニー」という特徴、相違点としての「瓜州の降参」と「延惠」という人物」の四点に着目し、藤枝論文からの影響を検討する。

ただし、その前に「節度使」はどういう存在なのか、その沿革を確認しておきたい。歴史上において、「節度使」は唐代（六一八～九〇七年）に設置され、最初は異民族の侵入を警備する辺境守備隊の司令官として組織された。景雲二（七一）年、「河西節度使」の設置により、「節度使」という官職名が定着するようになった。官位授与の際、朝廷から「旌節」という儀式用の武器が与えられ、地方の軍事、行政や財務をつかさどることになる。安史の乱（七五五～七六三年）後、各地に節度使が乱立するようになり、私兵を擁し、官位を子孫や部下に譲り、地方を割拠することとなった。節度使はその管轄地域に軍号（軍隊の所属を表す名称）をつけた名で称される。例えば、本稿で考察する「沙州帰義軍節度使」の場合、「沙州」はその管轄地域であり、「帰義軍」はその軍号にあたる。宋代（九六〇～一二七九年）の初頭、軍事権が次第に中央に取り上げられ、「節度使」は名誉職になった。つまり、官職名は残るが、任命された官吏は実際に現地に赴任せず、も

しくは、赴任しても実権を握らない状態となる。その後、元朝（一二七～一三六八年）になって、「節度使」は完全に廃止された。⁹⁾

特に「帰義軍節度使」に関しては、藤枝論文の「序説」の冒頭において、次のようにその概略が紹介されている。

帰義軍節度使とは唐の大中五年^{西紀六八六年}より北宋の皇祐年間

政権——乃至は小王国である。唐朝の西方発展は前古未曾有の

ものであつたが、安史の乱ののちその国力が衰へ初めると隴

右・河西・安西の諸地方、すなはち今日の甘肅・新疆両省の地

には南方より吐蕃が進出して来て之を領有するに至つた。武

宗・宣宗の頃にこの吐蕃の支配が動揺しはじめたとき、沙州の

土豪張議潮が吐蕃より離反して唐に帰附し、大中五年に帰義軍

節度使に任ぜられ、爾後唐の亡びる頃までその一族の者がこの

節度使を承襲した。（略）五代に入ると曹氏が之に代り、もとの如く帰義軍節度使の称号を授けられ、また燉煌王とも称して居り、五代・宋の中原各朝に入貢すると、もに、北の契丹にも朝貢をつゞけ、十一世紀の半ばに至り西夏のために併合せられて、その二百年の歴史を終へた。¹⁰⁾

ここで、時代背景とともに、張議潮から始まった「沙州帰義軍節度使」の二百年間の歴史が、唐代の張氏一族と五代・宋の曹氏一族に分

けられてまとめられている。「帰義」とは、「正義に帰服する」という意味である。初代の張議潮は、異民族と見なされる吐蕃の勢力から離れ、正統かつ正義と称する漢民族の唐王朝に帰服したため、「帰義軍」の軍号が与えられたのである。

三、藤枝論文との共通点

三―一、沙州に関する概説

実際に、小説「敦煌」における「帰義軍節度使」に関する描写を見ていく。まず、その根拠地である沙州について確認する。「第二章」の冒頭部で、主人公趙行徳が「靈州に近い一聚落にはいった」ことに伴い、以下のように、河西地方の紹介がなされる。

ここ（靈州を指す——稿者注）から西方は漢の武帝の拓いた所謂「河西四郡」であり「五涼の地」であって、中国本土と西域とを繋ぐ回廊をなし、漢以降長く中国歴代の西域経営の前進基地であったところである。そして、曾ては涼州にこの回廊を統轄する河西節度使が置かれ、後に沙州に設置された帰義軍節度使がそれに代わったが、孰れにしても中国の勢威の行なわれた地方であった。その後吐蕃、回鶻がこの地を占領する時期があつて、以後中国の支配の及ばない化外の地になったが、現在

は多くの異民族がそれぞれ集団を作つて幾つか小王国を形成していた。そしてそうした異民族の中で最も強盛を誇っているのが、興慶を根拠地としている西夏であつた。西夏の他では涼州に拠る吐蕃の一部族、甘州に拠る回鶻、そして一番西方の沙州に帰義軍節度使の名を留めた漢族の集団があつた。（第二章・二九六頁）¹²⁾

こうして、興慶の西夏、涼州の吐蕃、甘州の回鶻（ウイグル）、沙州の帰義軍節度使というように、河西地方の主要な集団とそれぞれの勢力範囲が示される。それと同時に、帰義軍節度使が小説に初めて登場し、その配下の沙州は、異民族に取り囲まれながらも、漢民族が支配している地域だと記される。

次に、この部分に関して、井上が参考にしたと思われる藤枝論文の関連箇所を挙げてみる。

張・曹二氏の拠つた沙州は漢の武帝の拓いた「河西四郡」、または唐人のいふ「五涼」の地の最西端に位置する都市であつて、いはゆる西域の三道の分れ出る要衝である。（略）支那本土と西域とをつなぐ道は、この河西地方を経由するもの、すなはち五涼諸市を東より涼・甘・肅・瓜と経過して沙州に到るのが古来の常道であつた。（略）

従つて河西地方はつねに支那歴朝の西域経営の前進基地とな

つてゐた。⁽¹³⁾

地理的に、沙州は河西地方の一番西に位置し、従来、中国の本土と西域とをつなぐ重要な場所として紹介されている。

小説「敦煌」と藤枝論文において波線を付した箇所からわかるように、「河西四郡」、「五涼の地」、「西域経営の前進基地」など、歴史背景に関する描写については、井上は藤枝と同じ表現を使っている。これは、小説「敦煌」と藤枝論文との一つの共通点だと考えられる。

三二二、「漢人コロニー」という特徴

「河西四郡」または「五涼の地」の最西端にある都市敦煌（沙州）を支配する帰義軍節度使に関して、先に見たように、小説「敦煌」ではそれが「漢族の集団」であることが指摘されている。それ以外にも、同じような内容が小説中で何度か強調されている。詳しくは後述するが、沙州帰義軍節度使と瓜州の太守は兄弟である。そのため、小説の中で、瓜州と沙州が同時に取り上げられる場合が多い。例えば、「瓜州と沙州は漢人の経営している地であって、曾ては節度使張氏一族が実権を握り、現在は代わつて曹氏一族の拠るところであつた」（四章・三三九頁）という記述がある。かつての「張氏一族」と現在の「曹氏一族」は、前述の藤枝が指摘した唐の張氏時代と五代・宋の曹氏時代に対応しており、瓜州と沙州が昔から漢民族の支配地であることが語られている。この二州に関して、以下のように、西夏の見方も述べら

れている。

西夏としてはもともと西域への門戸をなすこの二州（瓜州と沙州を指す——稿者注）へ、いつかは兵を進めなければならなかった。ただこの二州に関する限り、事情は頗る複雑であった。今まで攻略した涼州や甘州や肅州の場合とは違って、相手は吐番でも回鶻でも、それらの支族でもなく、れっきとした漢民族であつた。現在は母国宋の支配下にはなく、一つの独立国家の体裁を取つてはいたが、併し、はっきりと宋と無関係な国とも言いきれなかつた。未だに権力者曹氏は、形式的ではあるが沙州節度使の名を宋朝から貰つていたし、若しこの二州と宋との間に異民族の蟠踞がなかつたら、ここは当然曾てそうであつたように、宋国の一部である筈であつた。謂つてみれば、ここは異民族の侵入に依つて母国と隔絶され、已むなく独立国家の形を取らざるを得なくなつた漢民族の小さい島であつた。（四章・三三九頁）

要するに、瓜州と沙州は、異民族の侵入によつて母国宋と隔てられてはいるが、「れっきとした漢民族」が作り上げた「独立国家」であるとされる。

これらの記述も井上靖が藤枝論文を参照した結果だと思われる。藤枝論文において、帰義軍節度使の特徴の一つとして、「諸外族の間に

国を立てた漢人コロニーであること」⁽¹⁴⁾が挙げられている。具体的には、次のように記されている。

敦煌は漢人が住み支那文化の風靡してゐた町である。今更にとごとしく言ひ立てれば、或は笑止の沙汰と思ふ人もあるであらう。しかし我々は帰義軍が回鶻や吐番にとり囲まれて支那本土から切離されて国を立て、ゐたすがたを正しくみねばならぬ。

度々述べた様に敦煌は夷夏雑処の地である。しかし帰義軍は支那人が立てた国であつて、支那人が支配者となつて居り、その国の文化は主として支那の文化であつた。⁽¹⁵⁾

藤枝のいう「支那」とは、「中国」に対してかつて日本人が用いた呼称⁽¹⁶⁾である。一方、「中国」は「漢民族の居住地」であり、「古来、漢民族は周辺の外民族を蛮夷と称し、自らは世界の中心にあることを誇りに」⁽¹⁷⁾するため、「中国」と自称する。これらのことに基づき、「支那」⁽¹⁸⁾「中国」⁽¹⁹⁾「漢民族」と見なしてよからう。藤枝の記述を「漢民族」という言葉で統一してまとめると、敦煌（沙州）は異民族に取り囲まれながらも、漢民族が支配している独立国家であり、漢民族の文化が主体となっている、ということである。即ち、「支配者」と「主とする文化」の二点から、敦煌の「漢人コロニー」としての特徴が説かれている。

さらにいえば、小説「敦煌」において、沙州の支配者「曹賢順」は、「威厳を具え」ている意志の強い武人として設定され、彼の結末は西夏との戦いに戦死した。西夏と戦う前に、瓜州の太守・弟の延恵から瓜州が陥落した話を聞いた時、曹賢順は次の発言をする。

「いつかは西夏の侵略を受けなければならぬと思つていた。ただそれが早く来ただけだ。張議潮以来の沙州節度使の名誉にかけても闘わねばならぬだろう。ただ残念なことは、現在の沙州に西夏の大量の軍に対抗するだけの武力がないことだ。わたしの代で曹氏が滅びることになるが、これも致し方あるまい。往時、この国は吐番に征服され、長い間漢人は平時吐番の服を着、祭日の時だけ漢服を着て天を仰いで慟哭したと伝えられているが、またそれと同じことがこの国の者を見舞うだろう。併し、一つの民族が永久にこの土地を征服することはできない。吐番が去つたように、西夏もまたいつかは去るだろう。その時、そのあとにはわれわれの子孫が雑草のような残り方で残っているだろう。それだけは疑うことができないことだ。なぜなら、ここには漢人の霊が、他のいかなる民族の霊より多く眠っているからだ。ここは漢土なのだ」（八章・三七九頁）

最初の傍線部にあるように、初代の帰義軍節度使「張議潮」の名前が挙げられ、昔から漢人である節度使が沙州を支配してきたことが語

られる。波線部の「漢服」と後の傍線部の「漢人の霊」は、それぞれ服装と精神面に反映されている漢文化と見なすことができると思われる。特に最後の「ここは漢土なのだ」という断定的な表現は、地理的にも文化的にも、沙州は漢民族が所有するものと強調されている。

藤枝が指摘した敦煌の「漢人コロニー」としての特徴、つまり漢民族が「支配者」であることと漢文化が「主とする文化」であることは、曹賢順の発言にも反映されているといえよう。

実際、曹賢順が語っている吐蕃に征服された歴史については、次のように、藤枝論文にも同じ内容が記されている。

かうして吐蕃の治下に入った五涼地方の漢人の状態について、
新唐書吐蕃伝には右の沙州陷落の記事につづけて、「沙州の人々はみな胡服を着て吐蕃に仕へたが、毎年父祖を祀るときには中国の服を着て慟哭し、またそれを感つてゐた」といふ。⁽¹⁸⁾

藤枝が参照した『唐書』（『新唐書』）の原文は、次のように書いてある。

州人皆胡服臣虜每歲時祀父祖衣中国之服号慟而感之⁽¹⁹⁾

この文は、藤枝が解釈したとおりの意味で、初代の帰義軍節度使張議潮が吐蕃より離反して唐に帰服するまで、沙州に居る漢人が漢服さ

え自由に着られないという境遇を描いている。『唐書』（『新唐書』）は、「敦煌」執筆時の参考文献リストには含まれていないものの、井上靖の次の述懐から、参考にしたと推測される。

小説の史料にした五世紀の『法顕伝』や七世紀の玄奘三蔵の著した『大唐西域記』などは暗記する程に読み返したものです。また西域は北方の遊牧民や強力な遊牧国家と、西域を経営しようとした中国の抗争の歴史の場ですから、『漢書』、『後漢書』、『唐書』など中国の国史には必ず「西域伝」という一章があり、それらも根本の資料にしました。⁽²⁰⁾

これは、一九七七年一〇月一〇日付『週刊読書人』（第120号）の「本」と人」と欄に刊行された談話である。井上は、中国の新疆ウイグル自治区のホータン（昔の于闐地域）を訪ねた感想を語っている。その中に、于闐が舞台となった歴史小説「異域の人」（『群像』第8巻第8号、一九五三年七月）と「崑崙の玉」（『オール讀物』第22巻第7号、一九六七年七月）の二作品が取り上げられ、引用にあるように基本的な参考資料が示されている。ここから、井上靖が『法顕伝』と『大唐西域記』、そして『唐書』を含む中国の史書を熟読したことがわかる。「敦煌」には直接関わっていないが、中国に関する歴史小説の執筆に際し、井上は基本として、ここに挙げられている史料を参照したのではないかと考えられる。

一方、前述した沙州が吐蕃に征服された歴史に関して、小説「敦煌」の描写を、藤枝論文と『唐書』（『新唐書』）における記述と照らし合わせて確認すると、「慟哭」など藤枝論文と同じ言葉を使っている箇所があるとわかる。また、「慟哭」の直後の「と伝えられている」という表現も、藤枝論文の最後の「といふ」に対応しているようにうかがえる。断言はできないが、この部分の描写は、井上靖が『唐書』（『新唐書』）を意識しながら、藤枝論文を主として参考にしたと推察される。

四、藤枝論文とのずれ

四一、瓜州の降参

「漢人コロニー」である瓜州と沙州が西夏に攻略される前に、瓜州の権力者が自ら西夏に降参した事件が起こった。これに関して、藤枝は『宋史』の「夏国伝」を参照し、甘州攻略の事件と同時に取り上げ、次のように記している。

甘州も徳明以来の屢次の攻撃の後に天聖六年^{西紀一〇二六年}（藤枝が

記している西紀「一〇二六年」は「一〇二八年」の誤記だと思

われる——稿者注）に至つて西夏の獲る所となり^{（宋史卷四八五、夏国伝上）}、

次いで同八年には瓜州の王なる者が西夏に降つたといふ^{（同）}。²¹⁾

『宋史』の原文は以下のとおりである。

天聖六年徳明遣子元昊攻甘州拔之八年瓜州王以千騎降于夏²²⁾

天聖六年、徳明は子元昊に甘州を攻撃させて攻略した。（天聖）八年、瓜州王が千騎を率いて西夏に降つて来た。（稿者訳）

要するに、天聖六年、西夏が甘州を攻略し、天聖八年、瓜州王が自ら西夏に降参したということである。

一方、小説「敦煌」では、甘州攻略について、「李元昊が自ら全軍を率いて、回鶻人の拠点である甘州の攻略に取りかかったのは、（天聖六年——稿者注）五月の中頃であった」（二章・三〇八頁）と描かれる。この時間設定は、『宋史』または藤枝論文に記されている「天聖六年」と合致している。

だが、瓜州王が西夏に降参する時期はどうであろうか。小説「敦煌」において、瓜州の降参は、西夏と吐蕃との戦争を背景に、「（西夏の——稿者注）部隊が肅州へはいつてから四カ月たった翌天聖九年の三月、突如吐蕃の大軍がこの方面を目指して進攻して来るといふ情報を得て、西夏軍はそれを迎え撃つために城を出た」（四章・三三七頁）とある。そして、連日の戦闘の後、「吐蕃の前軍は殆どの兵を失って、完全に潰え去り、「吐蕃の本営を襲った西夏の本隊は、積雪を踏んで凱旋し」（四章・三三九頁）たと描かれている。ただし、よく読むと、その後「旬

日ならずして、瓜州の太守延恵が部兵千騎を率いて西夏に降つて来た」（四章・三三九頁）とある。つまり、瓜州王が西夏に降るのは、小説では「天聖九年の三月」頃となるのであり、それは藤枝論文と『宋史』に記されている「（天聖）八年」とは、一年間ずれるのである。この相違点は、小説の中で、歴史的事実とは別に作り出された主人公趙行徳の行動に、整合性を持たせるために生じたずれだと考えられる。これに関連して、趙行徳の遍歴に関する年表（次頁）を示す。

年表にあるように、天聖四年、趙行徳は進士試験を受けるために都開封へ上る。落第した後、偶然西夏文字が記されている布切をもらい、それをきっかけに、西夏への旅立ちを決心する。天聖五年、靈州を経て涼州に入り、そこで兵卒として、西夏軍の漢人部隊に配されたまま、一年間を過して天聖六年を迎える。その五月に、甘州は西夏に占領され（これに関しては前述したように、歴史的な事実と合致している）、趙行徳は城内でウイグルの王女と出会って愛し合うようになる。しかし、まもなく六月に、西夏文字を学ぶために、趙行徳は興慶に派遣される。ウイグルの王女と別れる時、趙行徳は一年以内に帰つて来ると約束したが、結局、約束を守れず興慶で二年間を過し、再び甘州に戻つて来たのは天聖八年の一〇月末である。その時、ウイグルの王女は既に李元昊の側室になり、生きて帰つて来た趙行徳を見ると、彼女は苦しんで城壁から投身自殺した。その後、物語は天聖九年の三月、つまり西夏と吐蕃との戦争、及び瓜州王が西夏に降参した時点（これに関連しては前述したように、歴史的な事実と一年ずれている）に移る。

ここまでの過程を見ると、瓜州の降参について、小説と歴史的な事実との間の一年ずれは、趙行徳がウイグルの王女との約束を破ることから生じたと思われる。繰り返しになるが、趙行徳は一年以内に帰つて来る約束をし、ウイグルの王女と別れ、西夏文字を学びに興慶に赴いた。ところが、西夏文字を習得してから、「趙行徳は西夏文字と漢字との対照表を作る仕事に取りかかり」、「月日の経つて行くのを忘れた」（四章・三三四頁）のである。それで、ウイグルの王女との約束を破り、一年遅れて甘州に戻つて来た。一方、ウイグルの王女は彼が既に戦争中に死んだと思い、同時に、李元昊からの死の責苦にあい、やむを得ず李元昊の側室になった。その結果、二人が再会した時、王女は苦しんで、心の潔白を証明するため自殺した。彼女が退場した後、物語は戦争場面に入る。まず、西夏軍が吐蕃を破り、それから、瓜州の太守延恵が瓜州を戦火から免れさせるために自ら西夏に降参した。趙行徳が再び甘州に入ったのは天聖八年の一〇月末以降となるため、その年代は物語の進行にあわせ、自ずと翌天聖九年に入ることになるのである。こうして、藤枝論文と『宋史』に記されている「（天聖）八年」とは、一年間ずれることになったのではないかと考えられる。

趙行徳の遍歴に関する年表（小説「敦煌」の本文をもとに作成したものであり、傍線部は年代と場所を示す。）

年代	出来事
天聖四（一〇二六）年 春～夏	<ul style="list-style-type: none"> ・趙行徳が進士試験を受けるために都開封へ上る。 ・落第するが、城外の市場で偶然西夏の女を救い、西夏文字が記されている布切れをもらう。 ・西夏文字を追究するため、西夏への旅立ちを決心する。
天聖五（一〇二七）年	<ul style="list-style-type: none"> ・趙行徳が靈州を経て涼州に入り、そこで兵卒として、西夏軍の漢人部隊に配されたまま、一年間を過して天聖六年を迎える。
天聖六（一〇二八）年 五月～六月	<ul style="list-style-type: none"> ・五月の中頃、李元昊が自ら全軍を率いて甘州を攻略する。 ・趙行徳が甘州城内でウイグルの王女と出会って愛し合うようになるが、まもなく、六月に西夏文字を学ぶために興慶に派遣される。 ・一年以内に帰って来る約束をし、趙行徳がウイグルの王女と別れる。
天聖八（一〇三〇）年 一〇月末	<ul style="list-style-type: none"> ・趙行徳が約束を守れず、興慶で二年間を過し、再び甘州に戻って来たのは天聖八年の一〇月末である。 ・ウイグルの王女が既に李元昊の側室にされ、生きて帰って来た趙行徳を見ると、彼女は苦しんで城壁から投身自殺する。 ・西夏軍が肅州へ入る。
天聖九（一〇三二）年 三月	<ul style="list-style-type: none"> ・西夏軍が吐蕃と闘って勝利を収める。 ・まもなく、瓜州の太守延恵が部兵千騎を率いて西夏に降参する。

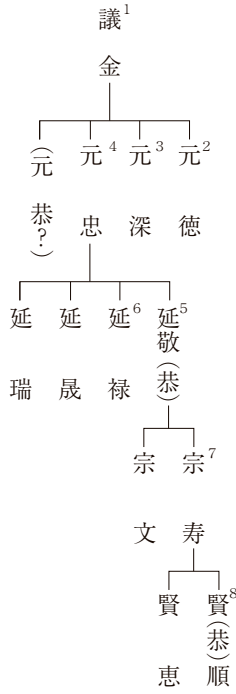
（趙行徳のその後の遍歴は、ここでの分析に必要なため省略する。）

四一二、「延恵」という人物

西夏に滅ぼされるまで、曹氏一族は八代続き、瓜州と沙州を治めていた。藤枝は、『五代史』、『宋史』、『宋会要輯稿』や『統資治通鑑長編』などの史書に基づき、以下のような「曹氏系図」（1～8の番号がついている箇所は、曹氏八代の節度使の名前を指す）を提示している。

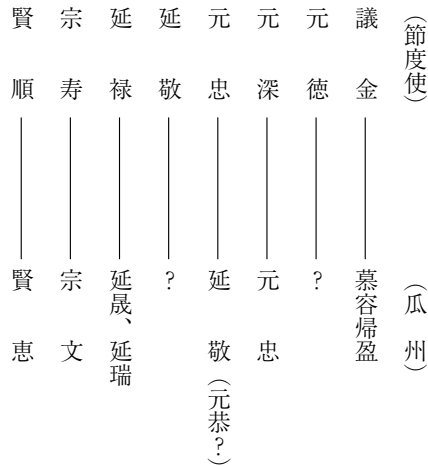
【図①】曹氏系図（藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」（三）（『東方学報』

第13冊第1分、京都大学人文科学研究所、一九四二年六月）
六四頁から引用した。）



また、曹氏時代の沙州帰義軍節度使と瓜州の権力者の名前に関して、藤枝はさらに次のような対応図を示している。

【図②】沙州帰義軍節度使と瓜州の権力者との対応図（【図①】に同じ、
七四頁の注（142）から引用した。）



そして、両者（沙州帰義軍節度使と瓜州の権力者）の詳しい関係について、藤枝は次のことを述べている。

また、曹氏時代には節度副使格に相当する人物——節度使の弟若しくは長子——が瓜州を領するのが普通であつた模様である。曹議金の時代には瓜州刺史慕容帰盈なる者の名が見えるけれども、右に述べた様に元深が節度使であつた時には弟の元忠が瓜州刺史であり、元深に代つて元忠が立つとその子の延恭が瓜州団練使となつたのであつて、この制は曹氏最後の節度使賢

順の下に、弟の賢恵が知瓜州となるまで引続き行はれてゐた。⁽²³⁾

上記の図表と記述には、曹氏八代の節度使の名前や、節度使と瓜州の権力者との関係が記されている。その最後の一代に注目すると、沙州帰義軍節度使は「曹賢順」が担当しており、その下に弟の「賢恵」が瓜州の管理役を担当していることがわかる。

これらに関連して、小説「敦煌」に類似した描写がある。まず、曹氏八代の節度使の名前を確認する。小説の終わり頃に、曹氏一族が滅亡した後、その家伝が仏洞に祀られる場面がある。家伝という形で各代当主、つまり節度使の名前が紹介されており、「曹議金より始まって、元徳、元深、元忠、延敬、延祿、宗寿、賢順の曹氏八代の当主の名が認められ、それぞれの生年月日から、その生涯の事蹟に到るまでかなり詳細に書きつけられてあった」(十一章・四一六頁)というように描かれる。【図①】の「曹氏系図」に1〜8の番号が振られているところと照らし合わせてわかるように、初代の議金から最後の賢順まで、曹氏一族八代の節度使の名前に関しては、井上の記述は藤枝論文と合致している。

ただし、一点だけ異なるところがある。小説「敦煌」に登場するのは、最後の沙州帰義軍節度使「曹賢順」とその弟・瓜州の太守「延恵」である。この二人の関係について、小説では確かに、「節度使曹賢順は沙州にあつてそこを統べ、弟延恵は瓜州の太守として、瓜州を支配していた」(四章・三三九頁)と書いてある。つまり、沙州帰義軍節

度使と瓜州の太守が兄弟であるとされている。しかし、その「弟」の名前に相違がある。藤枝論文では、「賢恵」となっているのに対し、小説「敦煌」では「延恵」となっているのである。厳密にいうと、それでは「弟」の名前の「輩行字」がおかしいことになる。「輩行字」とは、同族の同世代の名につけられている同一の頭文字である。漢民族の名の付け方の慣例として、姓の次に世代関係を表す輩行字が使われる。【図①】の「曹氏系図」で説明すると、第二代の「元徳」、第三代の「元深」と第四代の「元忠」は兄弟であり、彼らの名前に同じ輩行字「元」が使われている。そして、第五代の「延敬」と第六代の「延祿」も兄弟で、二人とも名前に「延」という輩行字が入っている。同じように、最後の沙州帰義軍節度使「賢順」の場合、名の最初の文字「賢」は輩行字であり、それと相応して、彼の弟も「賢」を輩行字に使い、藤枝の指摘する「賢恵」という名前になるべきであろう。ところが、井上は「延恵」と記しており、これは藤枝論文とのずれである。実際、「賢恵」なのか「延恵」なのかに関しては、羅振玉は「瓜沙曹氏年表」において、次のように注記をつけている。

〔大中祥符七年〕——稿者注〕四月、《長編》〔統資治通鑑長編〕を指す——稿者注〕作「四月甲子」。以帰義軍兵馬留後曹賢順為本軍節度使、弟賢恵《宋史・沙州伝》誤作「延恵」、《長編》等並作「賢恵」。為檢校刑部尚書、知瓜州。⁽²⁴⁾

(大中祥符七(西紀一〇一四)年)四月、『統資治通鑑長編』では「四月甲子」と記されている。帰義軍兵馬留後曹賢順が本軍の節度使になり、その弟賢惠（賢惠）、『宋史・沙州伝』では「延惠」と誤記され、『統資治通鑑長編』などでは「賢惠」と記されている。が検校刑部尚書として瓜州の管理役になる(稿者訳)

羅氏の注記によると、『宋史』の「沙州伝」に記されている「延惠」は「賢惠」の誤記であり、『統資治通鑑長編』などの史書では「賢惠」と記されるという。

『宋史』の本文では、確かに「大中祥符末宗寿卒授賢順本軍節度弟延惠（延惠）為檢校刑部尚書知瓜州」と書いてあるように、その「弟」の名前は「延惠」とされる。『宋史』に関しては、既に確認したとおり、藤枝論文にも井上の参考文献リストにも挙げられている。それと同時に、羅振玉の「瓜沙曹氏年表」に関しても、藤枝も井上も参考にしたという。藤枝論文には、次の記述がある。

ペリオ氏発見の文書が北京に持つて来られたとき、羅振玉氏をはじめ、曹君直（曹君直）、蔣斧諸氏がそれらの文書の解説・考証のうち、帰義軍の史事に触れる所があつたのが、これの研究のはじめで、かくて羅振玉氏は「張義潮伝」・「瓜沙曹氏年表」の二篇をものして、帰義軍二百年の歴史の大概を述べた。²⁶⁾

羅氏の「瓜沙曹氏年表」は、帰義軍節度使の歴史を研究するための一つの土台だと指摘される。そして、井上は「小説「敦煌」ノート」において、「羅振玉の『雪堂叢刻』の中の「瓜沙曹氏年表」も逸しられぬものである」と語り、その重要性を強調している。

だが、それでも小説「敦煌」の中で、「弟」の名前が「賢惠」ではなく、「延惠」となっているのは何故か。一つには、井上が『宋史』を正史として尊重したためということも考えられようが、一つには、井上が羅振玉の注記を目にしていなかったということも考えられよう。前引した「瓜沙曹氏年表」にあるように、「延惠」の名前が「賢惠」の誤りだという説明は、注記として小さく示されている。この「年表」は多数ある参考資料の一つであり、小説創作時に、井上は細かいところまで、一つずつ確認していないこともありえるだろうと推察される。

また、人物設定の面から、あえて「賢」を使わなかった可能性も考えられる。「延惠は肥満した躰と、どんよりと曇った動かない表情を持った四十五、六歳の人物」(五章・三四三頁)であり、その性格は、「西夏が強大になって、その脅威を感じると、すぐ臣属を誓わないと安心していられないような小心で神経質なところ」(五章・三四五頁)があると描かれている。また、「西夏の本隊が沙州、瓜州へ侵入するという報に接すると、「怯えきって半病人のようになって」(七章・三六六頁)のである。彼の西夏対策は、「毎日のように考えを変え、温和しい態度で西夏の本隊を迎える気になったり、城を棄てて沙州へ

移り、そこで西夏の侵入を喰いとめる考えになったりして」(七章・三六六―三六七頁) おり、明晰な判断力に欠ける。一方、「賢」は「学徳のすぐれていること」や「かしこいこと」²⁸⁾を指す。小説の中の「延恵」には、こうしたイメージを少しでも与えたくなかったため、「賢」を使うことが避けられたのではないかと推察される。

さらにいえば、「延恵」は「仏教を信ずる点では人に劣らない」(五章・三四三頁)と自評している。自ら西夏に降参した後、朱王礼や趙行徳ら西夏の漢人部隊が瓜州に入り、彼の館に赴いたとき、延恵は次の発言をする。

「西夏は最近西夏の文字を持ったと聞いているが、私は私の持っている經典を西夏語に釈して、西夏へ贈りたいと思う。そうした釈経の仕事は既に興慶でやっているに違いないが、私は私の仏に対する報恩の仕事として、そのことを為したいと思う。それに関する必要な経費は全部負担するが、それに協力して貰えないだろうか」(五章・三四三頁)

經典を西夏語に翻訳する目的は、西夏に贈るためである。一方、ほかの何ものでもない經典にすること自体、及び傍線部の「仏に対する報恩」という言葉からは、延恵の仏教に対する熱心さがうかがえよう。その他にも、瓜州から沙州へ撤退する時に、彼は「沙州を救え、寺を守れ、そんなことを一人で口走って」(七章・三七五頁) おり、仏教

のことを第一に考えていることが描かれる。そして、曹氏家伝の最後には、「仏に対する信仰篤く、西夏侵入の折逃げるを潔しとせず、一人沙州城内に留まって自らを火中に投ず」(十一章・四一六頁) というように、八代当主の次に延恵の事蹟も書き込まれている。こうして、小説内では延恵の仏教に対する信仰心の篤さが至るところで強調されている。

前述した政治的に無能力者である反面、仏教を広め、重んじ、危機から守りたいというように、「延恵」の人物像にもう一つの性格が付与されている。なお、「延」は「延長」の意で、「長いこと」²⁹⁾を指す。小説中の「延恵」は、經典を長く存続させたい気持ちが強く、仏教の永遠性を一途に追求している。彼のこの面を考慮し、名前に「延」という字が与えられた可能性があると推察される。

五、まとめ

本稿では、藤枝晃の「沙州帰義軍節度使始末」を主な比較対象とし、小説「敦煌」における「節度使」の描写に関する考察を行なった。具体的には、共通点としての「沙州に関する概説」と「漢人コロニー」という特徴「相違点としての「瓜州の降参」と「延恵」という人物」の四つの面から検討した。

「沙州に関する概説」では、小説「敦煌」における描写と藤枝論文

における記述とを比較し、歴史背景に関する全体的な説明から具体的な言葉の表現まで、合致するところが多く、共通点として挙げた。

「漢人コロニー」という特徴」では、小説「敦煌」に描かれている瓜・沙二州が昔から漢民族の支配地であること、この二州に対する西夏の見方、最後の帰義軍節度使曹賢順の発言などを取り上げた。帰義軍節度使が「漢族の集団」であることが強調されるこの描き方は、井上靖が藤枝論文の「漢人コロニー」という箇所を参照した結果だと思われる。さらにいえば、小説中の曹賢順が語っている吐蕃征服下の漢民族の境遇に関しても、藤枝論文における記述と一致している。そのため、「漢人コロニー」という特徴」も共通点として挙げた。

一方、相違点の一つ目の「瓜州の降参」に関しては、事件自体は史料のとおりであり、つまり瓜州の権力者が自ら西夏に降参したということであるが、ただし、その年代が歴史的な事実と一年ずれている。それについて、架空の主人公趙行徳の遍歴に関する年表を示しながら検討した。彼の行動に整合性を持たせ、無理がないようにするために生じたずれだと考えられる。

相違点の二つ目の「延恵」という人物に関しては、藤枝論文をはじめ、羅振玉「瓜沙曹氏年表」と『宋史』の「沙州伝」の関連箇所を確認した。小説「敦煌」の中で、帰義軍節度使「曹賢順」の弟・瓜州の太守の名前が「賢恵」（藤枝論文と羅振玉「瓜沙曹氏年表」の注記における記述）ではなく、「延恵」（『宋史』の「沙州伝」における記述）となっているのは、井上靖が『宋史』を正史として尊重してい

る、あるいは羅振玉の注記を目にしていなかったためだと推察される。しかし一方で、小説における人物設定の面から、その性格に相応しい名前にするため、あえて「賢」を使わず、「延」という字を与えた可能性もあると考えられる。

つまり、本稿で検討した共通点と相違点をまとめると、次のようになる。「沙州に関する概説」、「漢人コロニー」という特徴」、さらには瓜州王が自ら西夏に降参したこと、及び沙州帰義軍節度使と瓜州の太守が兄弟であることなど、歴史背景のような大きな枠組みに関しては、井上靖は忠実に考証に基づいていると考えられる。一方、瓜州が降参した年代、「延恵」という人物に関する描写など、物語の進展や人物の造型に関しては、井上靖は史実を踏まえつつも、登場人物の行動や性格を最優先にするところもあったことがうかがえよう。

実際に、「敦煌」の執筆当時、創作のビジョンについて、井上は次のことを語っている。

こんどは楽に、自由に書くつもりである。登場人物の映像も、その行動も頭の中に一応つくり上げられてある。そこに、いままで調べた時代の背景、考証といったものを入れて行くだけである。一千年前の敦煌石窟の包蔵作業が、自分でつくり出した人物たちによって行われるわけだが、その立合人のような気持で書いて行けばいいと思う。⁽³⁰⁾

ここで、登場人物の映像・行動と時代の背景・考証は、歴史小説の二大要素として取り上げられている。まず、登場人物の映像・行動についての作者自身の想像が土台にある。それから、その土台に時代の背景・考証、つまり歴史的事実を加えていくという解釈になるであろう。

簡単に言えば、井上靖は「敦煌」において、架空の主人公趙行徳の人生を描き、敦煌千仏洞の経巻埋葬の謎を小説の形で解こうとした。当時の宋の時代背景や、科挙、河西地方の状況、西夏の興起、節度使や仏教など、物語に関わっている歴史的な要素に関しては、勿論史実をもとに書かれている。一方、本稿の考察でわかるように、登場人物の行動や性格に関しては、物語の進行に応じて無理がないように、歴史をずらした箇所もある。むしろ、歴史とかみ合わない場合は、登場人物の造型のリアリティを優先する井上靖の歴史小説観が、ここに見て取れるのではないだろうか。

注

(1) 「作家のノート」は井上靖自筆の公開日誌であり、一九五八年九月から

一九五九年七月・九月にかけて雑誌『新潮』（第55巻第9号〜第56巻第7号・第9号）に十二回連載された。その中で、井上の一年間（昭和三三年七月六日〜昭和三四年七月二日）の創作活動が詳しく記録されている。「敦煌」の創作はちょうどその間に行なわれ、井上が執筆前

から脱稿後にかけて、どのように考えていたのか、また、どのような資料を参考にしていたのかに関しては、その日誌から確認できる。「敦煌」については、「自作解題」として、一九七二年一〇月に新潮社より刊行された『井上靖小説全集』第15巻に収められている。実際、それは、一九六〇年四月発行の『図書』第17号に掲載された「私の敦煌資料」の改題再録である。

『小説「敦煌」ノート』は、一九八〇年六月、日本放送出版協会発行の『シルクロード 絲綢之路第2巻 敦煌——砂漠の大画廊』に「敦煌と私」の総題で掲載したうちの最後の一篇である。その内容は、「敦煌について」とほぼ同じであり、冒頭部分、年代の違いによる変更点と、若干の添削以外に、提示された参考資料はすべて同じものである。

(2) ここに挙げている参考文献に関して、井上靖の自筆文章の内容と「敦煌」の執筆時期から見て、書誌情報は以下のものになると思われる。

- ・『宋史』（二元）脱脱等編、商務印書館、一九五八年（二月）
- ・『宋史紀事本末』（明）陳邦瞻編、中華書局、一九五五年九月
- ・藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」（『東方学報』第12冊第3分〜第13冊第2分、京都大学人文科学研究所、一九四一年二月〜一九四三年一月）
- ・『科挙』（宮崎市定、秋田屋、一九四六年一〇月）
- ・『新西域記』（上原芳太郎編、有光社、一九三七年四月）
- ・『水滸伝』（全13冊、吉川幸次郎・清水茂訳、岩波書店、一九四七年六月〜一九九一年一二月）

- ・松村一弥訳「東京夢華録」(松枝茂夫・今村与志編『中国古典文学全集第32巻 歴代随筆集』、平凡社、一九五九年六月)
- (3) 井上靖「小説「敦煌」ノート」(井上靖・NHK取材班『シルクロード 絲綢之路第2巻 敦煌——沙漠の大画廊』、日本放送出版協会、一九八〇年六月)、引用は『井上靖全集』別巻(新潮社、二〇〇〇年四月)より、二二一頁。
- (4) 井上靖「作家のノート」(『新潮』第55巻第9号、第56巻第7号・第9号、新潮社、一九五八年九月、一九五九年七月・九月)、引用は『井上靖全集』第24巻(新潮社、一九九七年七月)より、五〇六頁。
- (5) 藤澤秀幸「井上靖と敦煌」(『清泉文苑』第12号、清泉女子大学人文科学研究所、一九九五年三月)、五九頁。なお、本稿における引用中の傍線は稿者によるものである。区別するため、描写を比較する場合の傍線は「 」で示し、それ以外の場合は「 」で示した。
- (6) 尹芷汐「埋葬／発見される異民族の歴史——『樓蘭』『敦煌』論」(『井上靖研究』第13号、井上靖研究会、二〇一四年七月)、三一頁。
- (7) 注(6)に同じ、三一頁。
- (8) 「沙州帰義軍節度使始末」の四回の連載は、それぞれ(一)(二)(三)(四)と表記され、次のように掲載された。(一)一九四一年二月発行の第12冊第3分、五八〜九八頁、(二)一九四二年三月発行の第12冊第4分、四二〜七五頁、(三)一九四二年六月発行の第13冊第1分、六三〜九五頁、(四)一九四三年一月発行の第13冊第2分、四六〜九八頁。
- (9) 「節度使」に関する情報は、下記の参考文献に基づいてまとめた。
- (10) 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」(一)、『東方学報』第12冊第3分、京都大学人文科学研究所、一九四一年二月、五八〜五九頁。なお、引用にあたり、旧字体は新字体に改め、歴史的な仮名遣いはそのままとした。また、引用の中に、現代の判断基準では不適切な表現があるが、原文の歴史性を考慮し、そのままとした。以下同じ。
- (11) 『中国語大辞典』(角川書店、一九九四年三月)、一一六〇頁。
- (12) 井上靖「敦煌」の本文は『井上靖全集』第12巻(新潮社、一九九六年四月)によった。引用箇所がわかるように、本稿においては「(二)章・二九六頁」というように、章とページ数で示した。なお、ルビを適宜削除した。
- (13) 注(10)に同じ、五九〜六〇頁。
- (14) 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」(四)、『東方学報』第13冊第2分、京都大学人文科学研究所、一九四三年一月、八四頁。
- (15) 注(14)に同じ、八九頁。
- (16) 『日本国語大辞典』(第二版)第6巻(小学館、二〇〇一年六月)、九〇一頁。
- (17) 『日本国語大辞典』(第二版)第8巻(小学館、二〇〇一年八月)、一四

五六頁。

(18) 注(10)に同じ、八五頁。

(19) 〔宋〕歐陽修・宋祁編『新唐書』(縮印百衲本二十四史) 卷二二六下「列伝第一四二下 吐蕃下」(商務印書館、一九五八年二月)、一五一八頁。

(20) 井上靖「限りなき西域への夢」(『週刊読書人』第120号、読書人、一九七七年一〇月一〇日)、引用は『井上靖全集』第27卷(新潮社、一九九七年一〇月)より、五二二頁。

(21) 注(14)に同じ、五四頁。

(22) 〔元〕脱脱等編『宋史』(縮印百衲本二十四史) 卷四八五「列伝第二四四 外国二」の「夏国上」(商務印書館、一九五八年二月)、五六二四頁。

(23) 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」(三)『東方学報』第13冊第1分、京都大学人文科学研究所、一九四二年六月)、七一頁。

(24) 羅振玉「瓜沙曹氏年表」(『雪堂叢刻』、上虞羅氏、一九一五年)、引用は『羅振玉學術論著集』第8集(上)(上海古籍出版社、二〇一〇年二月)より、八四頁。なお、羅振玉(一八六六年八月八日～一九四〇年五月一四日)は、甲骨文字の研究者であり、敦煌学の分野でも大きな業績を残しており、『殷商貞卜文字攷二卷』(玉簡齋、一九一〇年)、『鳴沙石室佚書』(羅氏宸翰樓、一九一三年)などの著書がある。

(25) 注(22)に同じ、卷四九〇「列伝第二四九 外国六」の「沙州」、五六八七頁。なお、この文の意味は次のようになる。

大中祥符の末、宗寿(賢順と延恵の父親——稿者注)が卒し、賢順が

本軍の節度を授けられ、その弟延恵が検校刑部尚書として瓜州の管理役になる。

(26) 注(10)に同じ、六六頁。

(27) 注(3)に同じ、二二二頁。

(28) 『日本国語大辞典』(第二版) 第4卷(小学館、二〇〇二年四月)、七二一頁。

(29) 『日本国語大辞典』(第二版) 第2卷(小学館、二〇〇二年二月)、一四四七頁。

(30) 注(4)に同じ、五一二頁。

井上靖「敦煌」と藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」——「節度使」の描写をめぐる一

周霞

